羅生門

芥川龍之介

構造理解 次の空欄にあてはまる語句を本文からそれぞれ抜き出しなさい。

第一段（一八二・1～一八六・6）

ある日の〔①　　〕、一人の下人が羅生門の下で〔②　　〕を待っていた。四、五日前に主人から暇を出された下人は、さしあたり明日の暮らしをどうにかしようと、〔③　　〕考えをたどりながら、雨の音を聞くともなく聞いていた。

生きるためには、〔④　　〕を選んでいる暇はない。選んでいれば、〔⑤　　〕するだけである。しかし、いつまでたっても、「〔⑥　　〕しかたがない。」ということを、積極的に肯定する勇気が出ずにいた。下人は、夜を明かす場所を求めて、足を楼の上へ続くはしごのいちばん下の段へ踏みかけた。

第二段（一八六・7～一八九・9）

それから何分かの後、下人は、はしごの中段で身を縮め、息を殺しながら上の様子をうかがっていた。濁った、黄色い光が天井裏に揺れながら映ったので誰かいるらしいと知れたのである。下人は、〔⑦　　〕のように足音を盗んで、急なはしごを上り詰め、恐る恐る楼の内をのぞいてみた。楼の内には幾つかの死骸が無造作に捨ててある。下人は、それらの死骸の腐乱した臭気に思わず鼻を覆ったが、次の瞬間には〔⑧　　〕が嗅覚を奪ってしまった。猿のような老婆が、死骸の一つの顔をのぞき込むように眺めていたのである。老婆は死骸から長い髪の毛を一本ずつ抜き始めた。

髪の毛が一本ずつ抜けるのに従って、それを見ていた下人の心からは、〔⑨　　〕が少しずつ消えると同時に、老婆に対する激しい〔⑩　　〕に対する反感が強さを増してきたのである。

いや、むしろ〔⑪　　〕が少しずつ動いてきた。

このとき、下人はさっきまで自分が盗人になる気でいたことはとうに忘れていた。

語句理解 次の各問いにそれぞれ答えなさい。

1 傍線部のカタカナは漢字に直し、漢字はその読みをひらがなで書きなさい。

(1) 靴を八く。

(2) スミズミに届く光。

(3) 盗人を下らえる。

(4) ボールをケる。

(5) マタタく間。

(6) 殊に優れた作品。

(7) 行く手を塞ぐ。

(8) 侮蔑の感情。

(9) 嘲るような口調。

(10) 僅か一秒。

2 次の文の空欄に適当な**漢字一字**を入れて、（　）の中の意味になるようにそれぞれ文を完成させなさい。

(1) 手段を選んでいる□はない。（二八四・16）
（ゆとりはない）

(2) 頭身の□も太るような恐怖。（二八八・9）
（異常な恐ろしさ）

第三段
（一八九・10～一九二・4）

下人はいきなり、はしごから上へ飛び上がり、太刀に手をかけながら老婆の前に歩み寄った。下人を見た老婆は逃げようとするが、下人は老婆の腕をつかんで、無理にねじ倒した。

老婆の様子を見ると、下人は老婆の生死が自分の意志に支配されているのを意識した。すると、憎悪の心はいつの間にか冷め、後に残ったのは仕事が円満に成就したときの、〔⑫　　〕と満足ばかりであった。

少し声を和らげ、何をしていたのかと問う下人に、老婆は「この髪を抜いてな、〔⑬　　〕にしょうと思うたのじゃ。」と答えた。老婆が髪を抜いた女は、蛇を魚だと偽って売って生計を立てていた。飢え死にしないためにしかたのないことであった。ゆえに「この女は、おおかたわしのすることも〔⑭　　〕であろ。」と言う。

第四段
（一九二・5～一九三・12）

下人は、太刀を鞘に収めて、〔⑮　　〕とこの話を聞いていた。これを聞いているうちに下人の心には、さっき門の下で欠けていた勇気、老婆を取り押さえたときの勇気とは、全然、反対の方向に動こうとする勇気が生まれてきた。飢え死にをするなどという考えは意識の外に追い出されていたのである。

「では、俺が引剝ぎをしようと恨むまいな。俺もそうしなければ、飢え死にをする体なのだ。」下人はすばやく老婆の着物を剝ぎ取り、老婆を死骸の上に蹴倒して、瞬く間にはしごを〔⑯　　〕へ駆け下りた。

しばらくして、死んだように倒れていた老婆が、死骸の中から起き上がった。老婆は、はしごの口まではっていった。そこから、短い〔⑰　　〕を逆さまにして門の下をのぞき込んだ。外には、ただ〔⑱　　〕夜があるばかりである。

下人の行方は、〔⑲　　〕知らない。

3 傍線部の語句の本文中の意味として適当なものはどれか。次の中からそれぞれ**一つ**選んで記号で答えなさい。

(1) 暫時は何もできなかった。（一八八・8）

ア 時が経つにつれて。
イ ほんの短い間。
ウ しばらくの間。
エ とぎれとぎれの間隔。

[　　]

(2) こう言うと語弊があるかもしれない。（一八八・15）

ア 不適切な言い方で、誤解や不快感を生じる。
イ 抽象的な言い方で、分かりにくくなる。
ウ 古風な言い方で、気取っているように思われる。
エ 感情にまかせた言い方で、主観的になる。

[　　]

4 「大目に見」る（一九二・3）を使って短文を作りなさい。

内容理解 次の各問いにそれぞれ答えなさい。

◇第一段（一八二・1〜一八六・6）

1 この小説の設定についてまとめた次の表の空欄A〜Eに適当な語句をそれぞれ書き入れ、F〜Lにあてはまる語句を本文からそれぞれ抜き出して表を完成させなさい。

項目	時代	季節	時間帯	羅生門の状況	下人の年ごろと身分
根拠となる言葉	A 時代末期	晩秋	遅い B	荒廃していて、C な様子	年のころは D、E を失っている
	洛中（京都）は F、衰微していた。	G が欲しいほどの寒さ・きりぎりす	H ・刻限が I せいか・J 下がりから降り出した雨	洛中がその……のである。・昼間見ると……っている。ただ、所々、……が見える。	大きな K ・永年、使われていた主人から四、五日前に L を出された

2 「旧記によると、仏像や仏具を打ち砕いて……薪の料に売っていたということである。」（一八二・7〜9）とは、どのような状況を述べているのか。次の空欄にあてはまる語句を後ろの語群からそれぞれ選んで記号で答えなさい。

生活が困窮することで、人々は A すら失い、人心が B している状況。

ア 職　イ 暇　ウ 信仰心　エ 衰微　オ 荒廃

3 「しかしこの『すれば』は、いつまでたっても、結局『すれば』であった。」（一八五・5〜6）とは、どのようなことか。空欄A・Bにあてはまる語句を本文からそれぞれ抜き出し、空欄Cに十字以内で適当な語句を書き入れて説明文を完成させなさい。

生きていくためには A を選ぶことはできないことを B しながら、その先はどうするかの決断ができず、思考が C 状態であること。

4 「丹塗りの柱に止まっていたきりぎりすも、もうどこかへ行ってしまった。」（一八五・14〜15）とあるが、この描写には、どのような効果があるか。次の空欄に適当な語句を書き入れなさい。

効果。

◇第二段（一八六・7〜一八九・9）

5 「一人の男が……うかがっていた。」（一八六・7〜8）、「その男の右の頬をぬらしている。」（一八六・9）の部分では、他の部分のように「下人」と表現されていない。それはなぜだと考えられるか。次の中から適当なものを**一つ**選んで記号で答えなさい。

ア　時間の経過により、「下人」と呼ばれる者から「男」と表現することで、荒々しさを持った存在に変わったことを暗示することができるから。

イ　「下人」はあくまで主人を持った者のことなので、暇を出された今は「男」と表現したほうが現在の状況を的確に伝えることができるから。

ウ　物語が進行し、善悪の問題がテーマになることを予告するために、「男」と表現することで人間存在という側面を強調させることができるから。

エ　場面転換の後、客観的な視点で「男」と表現し、一瞬新たな人物の登場を読者に思わせることで、緊張感を持たせることができるから。

6 「すぐにそれと知れたのである。」（一八七・4）とあるが、「それ」とは、どのようなことを指しているか。次の空欄にあてはまる語句を本文から抜き出しなさい。

こと。

7 「ある強い感情が、ほとんどことごとくこの男の嗅覚を奪ってしまったからである。」（一八八・2〜3）とあるが、下人がこのような感情に襲われたのはなぜか。**三十字程度**で説明しなさい。

30

8 「この老婆に対する激しい憎悪」（一八八・14）とは、どのようなものか。次の空欄Aにあてはまる語句を本文から抜き出し、空欄B〜Dにあてはまる語句を後ろの語群からそれぞれ選んで記号で答え、説明文を完成させなさい（語句は一度しか使えない）。

老婆の、［A］という、死者を「冒瀆」する行為を目にするに及んで、一般的な［B］的基準から許し難いと判断したのではなく、生理的な反応としての［C］的な［D］を抱いたもの。

ア　道徳　イ　秩序　ウ　突発　エ　衝動　オ　嫌悪　カ　不信

9 「許すべからざる悪」（一八九・8）を他の語句で表したとき、最も近い意味になるものはどれか。次の中から**一つ**選んで記号で答えなさい。

ア　功罪　イ　禁忌　ウ　煩悩　エ　欲望

◇第三段（一八九・10～一九一・4）

10 この段における下人の心理の変化をまとめた次の表の空欄にあてはまる語句を本文からそれぞれ抜き出して表を完成させなさい。

下人の行動と老婆の行動	下人の心理の記述
下人　老婆をねじ倒し、［A］を突きつける。	老婆の生死が、全然、［C］のを意識した。
老婆　両手を震わせ、肩で息を切り、目を見開いて執拗く［B］。	←今まで険しく燃えていた憎悪の心を、いつの間にか［D］。
下人　老婆を見下ろし、少し声を［E］何をしていたのか問う。	答えが存外、［G］した。
老婆　死骸の髪を抜いて［F］にしようとしていたと返答する。	←老婆への憎悪が、［H］といっしょに心の中へ入ってきた。
老婆　［I］を避けるためにしたと弁明する。	第四段　冷然として、この話を聞いていた。

◇第四段（一九二・5～一九三・12）

11 「これを聞いているうちに、下人の心には、ある勇気が生まれてきた。」（一九二・7～8）とあるが、「ある勇気」とは具体的にどのような勇気か。次の空欄にあてはまる語句をこれより前の段から抜き出しなさい。

［　　勇気。］

12 「下人は嘲るような声で念を押した。」（一九二・14）とあるが、ここには下人のどのような気持ちが込められているか。次の中から適当なものを**一つ**選んで記号で答えなさい。

ア　武器を持つ自分の前にただ震えるばかりなのに、死人の髪の毛を抜くという許し難い行動を飢え死にしないためだなどと、口先だけで弁解している老婆の態度を軽蔑する思い。

イ　自分はもうこの老婆から着物を引き剝ぐことを決めているのに、それに気づかず、自分だけは生き延びることができると思いこんで、余裕を見せている老婆をあわれむ思い。

ウ　老婆の言ったことはそのまま自分の「引剝ぎ」に口実を与えることになり、それが老婆自身も認めなくてはならない論理になっていることへの皮肉な思い。

エ　死人の髪の毛を抜くという自分自身の行為を悪だと認めながら、その一方で下人の行為を悪だと批判する自分勝手な老婆の利己主義を嫌悪する思い。

［　　］

13 「一足前へ出ると、不意に右の手をにきびから離して」（一九二・14～15）とあるが、この小説全体にどのような効果をもたらしているか。次の中から**あてはまらないもの**を一つ選んで記号で答えなさい。

ア　思考から実行への転換を暗示する効果。
イ　逡巡から決断への変化を暗示する効果。
ウ　論理から行動へ踏み出すことを暗示する効果。
エ　仮定から現実の世界への飛躍を暗示する効果。

□

主題理解　**次の各問いにそれぞれ答えなさい。**

1 「下人の行方は、誰も知らない。」（一九三・12）とあるが、次の空欄にあてはまる語句を後ろの語群からそれぞれ選んで記号で答え、説明文を完成させなさい（語句は一度しか使えない）。

この小説が初めて発表された時、「下人は、既に、雨を冒して、京都の町へ強盗を働きに急ぎつつあった。」であった。それが、末尾を「急いでいた。」と改められ、さらに改稿されて現在の形になった。この経緯を知ると、芥川龍之介は強い表現意図をもって、下人のその後の［A］と行動をあえて記さず、断絶させるような終わり方にしたと考えられる。

このことは、下人の側からすれば、全ての行動、［B］が見通されていた語り手から［C］されたということであり、語り手の側からは下人を突き放したと言える。つまり、『羅生門』という［D］の時空間から、別の世界に立ち去った・追放したということになる。しかし、そうであるからこそ、読者はその後の下人について自由に［E］することができ、この物語にいっそうひきつけられることになるのである。

ア　物語　　イ　心理　　ウ　行き場所　　エ　解放　　オ　想像

2 この小説について述べた次の文の中から、**あてはまらないもの**を一つ選んで記号で答えなさい。

ア　作中に「作者はさっき」というように作者が現れて物語の展開を進めていく語り方には、この小説が現実世界とは違った幻想的な虚構の世界であることを強調しようという意図がある。
イ　平安朝の下人の心理を「Sentimentalisme（サンチマンタリスム）」とフランス語で表すことで、古典を現代的に解釈した小説である印象を読者に与えている。
ウ　暮れ方の門の下で始まった物語が「黒洞々たる夜」で終わることは、羅生門という場所において起きた、夕刻から深夜に及ぶ出来事であったという物語の時間・空間的枠組みを表している。
エ　門の下の場面から始まり、はしごをゆっくりと登ったあと楼上に飛び上がり、引剝ぎをして、またはしごを駆け下りるというように羅生門の空間性を生かした物語構成になっている。

□